



「女堀」の名称由来

おんなぼり
の堀跡の固有名ではないこともわかっていきます。

はじめに
赤城山の南麓、群馬県伊勢崎市のJR国定駅から北北西へ、地図上直線距離にして約900mに「つつみ公園」があります。グラウンドゴルフ場として整備された南北に細長い公園で、「女堀」という古代の灌漑用水路の終末点にあたります。遺構はほとんど残されていませんが、前橋市上泉町付近の桃木川を取水点として、東南東へと進み、つつみ公園がある西国定まで全長約12km、幅15〜20m、深さ3〜4mにわたって開削された大規模な水路でした。

『明治以前日本土木史』は、女堀の名称由来として「鎌倉二位尼頼朝の妻政子一夜にして竣功せず、其儘にありし」と紹介していますが、開削者は女堀の配水地にあたる荘園の在地領主だった秀郷流藤原氏だと考えられています。また群馬や埼玉、東京、長野の各地に同名の堀名または地名があることから、赤城山南麓



つつみ公園

「おんなぼり」が転訛

東京都立大学名誉教授の峰岸純夫氏は、女堀と呼ばれる水路のほとん

でもよかったのではないかと思えます。

東京の六郷用水

ここで東京の多摩川を取水源とした六郷用水の例を見てみたいと思います。六郷用水は、慶長16年（1611）に完成し、300年以上後の第二次大戦後ぐらいまで役割を果たしました。この六郷用水も大田区西嶺町から鶴ノ木にかけては、女堀と呼ばれていました。群馬や埼玉の女堀とは少し事情が違います。六郷用水は供用中のころから、女堀と呼ばれていたことを示す史料があるのです。

例えば、国学者の高田与清は文化12年（1815）に『世田谷紀行』の中で、工事がはかどらなかつたところ、女を参加させたら男どもが奮奮して上手くいったので、女堀というように記しています。このことから女堀は、必ずしも廃溝のみに与えられた名称ではないことがわかります。

女性を参加させた

六郷用水の工事には他にも、農業の支障にならないように女を労働力の主体としたとか、男10人に女を1人の割合で加え、現場が険悪にならないようにしたとか、理由はともかく女性を工事に参加させたと伝わっています。

実際、六郷用水は、多摩川を挟ん



二ヶ領用水の宿河原線（下流側の水路）

だ対岸の二ヶ領用水と3ヶ月交代で交互に施工され、年末年始しか休みがありませんでした。非常に過密なスケジュールなので、男性だけでは農業と両立することは難しく、女性も労働力として投入されていて不思議ではありません。

男堀と女堀

一方、二ヶ領用水の場合、多摩川からの取水口が2カ所あり、それぞれの水路がJR南武線久地駅付近で合流するのですが、上流から取水した用水路は「男堀」、下流は「女堀」と呼ばれていたといわれています。これは「男坂」「女坂」などの男女対称からな

どが廃溝であることから、役に立たない老女を意味する「おんな（オウナ）」をつけた「おんなぼり」の呼称が発生し、それが転訛して女堀になったと推測

しています。この説は、峰岸氏が東国中世史の権威であることから、有力な説とみなされています。

しかし、「おんな」という語に「役に立たない」という意味があったか疑問であり、古くならたり、使用されなくなつた灌漑施設は、単に「古」をつけて古井・古池・古溝・古川などの言葉があることも指摘されています。

ウナテが転訛

これとは別に、『日本書紀』では「溝」を「ウナテ」と読ませていることから、大溝堀が転訛して、女堀になったという説もあります。しかし、この説に対しても「溝」と「堀」は水路を意味する類似語であることから、「溝堀」と重ねるのは不自然

に仮託したのでしょうか。女堀と呼ばれる下流側の水路は、上流側の後に掘られたことから、あるいは完成の順序で名づけられたのかもしれない。いずれにしても由来が比較的明確であり、すべての女堀が一貫して同じではなく、それぞれ別の理由から名づけられたことを示唆する一例です。

童女堰

この他に古代の地名が由来となつた例もあります。長野県上田市の旧吉田堰は、古くは童女堰・嬢堰・女堰などと呼ばれていました。『小県郡史』によれば、「和名類聚抄」にみえる小県郡童女郷にみちびくための水路であつたから、と説明しています。ちなみに堰は、安曇野で用水路をさします。

ウナは畝？

赤城の女堀について、その姿形から由来を考えれば、次のような説もありえるかもしれません。

六郷用水の女堀は、「オナボリ」と読み、他の地域の女堀もかつては同じ読みをしていた可能性もあります。そして赤城の女堀は、溝の側に排土が盛り上げてあつたことがわかっていきます。まさに溝の古語読みを「ウナテ」と紹介しましたが、ウナテの「ウナ」は、「畝（ウネ）」であるという説もあります。畝は畑の

であるとの反論もあります。

あふなあふな

「おんな」と「大溝堀」の転訛説に反論した、群馬大学名誉教授の森田悌氏は、赤城の女堀と埼玉県川越市の女堀に共通する工法に着目しました。これらは小間割りで施工されており、森田氏はこの工法が由来するという説をとえています。

それは、『伊勢物語』九二段の「あふなあふな思ひはすべしなぞへなく高き賤しき苦しかりけり」という歌の「あふなあふな」が、「それぞれ」とか「身分相応」という意味であるから、「あふな」が「おんな（オウナ）」に転訛して、さらに女堀になったというのです。

しかし、当時「あふな」が「それぞれ」という意味で、一般化していたか疑問です。小間割り施工であつたなら、非常に小さい様を表す「細（コマ）かい」を転訛した「コマ堀」

作物を植えつける目的で連続に溝を切り、その土を溝の側に細長く盛り上げたものを言います。宅地開発がはじまる以前、広大な大地に延々と続いていた女堀は、連続ではありませんが、両側に排土が盛り上げられた様子が、遠くから俯瞰すれば畝のように見えたかもしれない。それを人々は「ウナボリ」と呼び、いつしか「オナボリ」に転訛したのかもしれません。

おわりに

これは形状が畝に似ていたかもしれない、という以上の根拠はなく、「ウナ」が「オナ」に転訛し、そこに「女」の字を当てることがありえたのか、つきつめてはいけません。ただ、私は物事の名づけ方は、単純なのではないかと考えています。

例えば、カブトムシは、兜に似ていることから名づけられています。兜を被っているように見える↓鎧武者のようだ↓勇ましい↓よってイサマムシにしようなどと、捻った連想はされませんでした。昔の堀跡の名にしても、女が参加したから、男女対にしたから、または形状や地名などから、名づけられたのではないかと

（文：江口知秀）